

## インタビュー① 元法務教官 大道美和さんを取材して



大道美和さん



池上理事



水口寛子

2021年10月26日オンラインにて インタビュワー水口寛子 池上洋

大道美和（おおみちみわ）さんは現在、特定医療法人研精会 稲城台病院リハビリテーション部精神リハチームで主任として勤務されています。今回は前職のことやOTへ転職に至った経緯、今後の展望などについてお話を伺いました。

### —前職法務教官を目指された経緯は？

元々高校生の頃から読書が好きで、フロイトやユングなどに興味がありました。大学で心理学を専攻していたのでそれを活かせる仕事がしたいと考えていました。家庭裁判所調査官か、法務教官を目指し、受かった方の法務教官になりました。今考えると家裁調査官になりたいと思う前の高校生の頃に、家族療法に興味を持っていた時期もあったので、今病院で患者さんの家庭環境や親御さんとの関係性にも関わることができる仕事が、自分が高校生の頃やりたいと思っていた仕事についているなと思っています。

### —法務教官はどのようなお仕事ですか？

法務教官は簡単にいうと少年院の先生で、身だしなみを含めた子ども達の生活全般を指導します。夜勤もあり、朝から晩まで泊まり込みで子ども達の生

活指導を行います。少年院には日課があり、朝は朝礼から始まり、裁縫、体操、畑仕事などを行います。そして昼食後、午後の日課を行います。それぞれの活動に合わせてきちんと取り組むよう指導をします。日課以外の時間では朝きちんと起きること、身の回りの整理をすること、食事をとること、部屋の片づけをすること、就寝時には寝ることなどの指導も行います。

少年院は、家庭裁判所から保護処分として送致された少年に対し、その健全な育成を図ることを目的として矯正教育、社会復帰支援等を行う法務省所管の施設である

少年院で行われている教育活動

●生活指導：善良な社会人として自立した生活を営むための知識・生活態度の習得

- 職業指導：勤労意欲の喚起，職業上有用な知識・技能の習得
- 教科指導：基礎学力の向上，義務教育，高校卒業程度認定試験受験指導
- 体育指導：基礎体力の向上
- 特別活動指導：社会貢献活動，野外活動，音楽の実施

法務省ホームページより

中学生の場合は昼間は学校の勉強をするので、国語や数学など、学校の時間割と同じように指導します。少年院の子ども達は勉強が苦手な子が多いので、足し算引き算から教えることもありました。

あとは畑で草むしりをしたり、なすやきゅうりの収穫など農作業もやります。調理係として子どもの食事を作っていた時期もあるので、調理場で女子少年（※少年院では女子も少年という）2人と一緒に少年院に収容されている子ども30～40人分の食事を作ることも職業指導として行っていました。

### 一どのように更生のお手伝いをするのですか

少年院に送致される子ども達の多くは元の生活が乱れています。その理由として親がいない、いても育児放棄などがあり、十分に養育や保護がなされていない場合があります。夜になると、母親の恋人が家に来て、その間家の外で待っていなければいけないという子もいました。三食食事をとったことがない、ご飯と味噌汁を初めて食べるという子もいました。なので必ずしも特別なことをするのではなく、普通の規則正しい生活をするのが重要です。たしかに悪いことをしたということではありますが、生活の乱れから、非行に走らざるを得なかったという子どもも多いような印象がありました。

少し知的に恵まれない子で学校生活になじめなくて学校不適應になる子もいます。学校に居場所がない子ども達は反社会的団体に取り込まれて優しく接されていくうちに性の対象にされたり薬物などの触法に及んでしまったりすることなどもあります。そのような団体から距離を置かせる意味もあると思います。親子でうまくいかない場合、一定期間離れて生活することが有効な場合もあると思います。

少年院は特別な事情以外、制度として収容可能な期間は2年以内と決まっています。期間は家庭裁判所の審判で決められ、数か月の短期処遇、1年から

2年程度の長期処遇のどちらかになっています。私のいたところではほとんどの場合は1年以上が多く、3-4か月は女子少年院のうちの一部の子たちでした。

再犯率ですが、刑務所と比べると、少年の方が再犯率は低いと言われています<sup>1)</sup>。子どもの方が柔軟性がある、可塑性が高い、とよく言われます。中には元の悪い集団のところに戻って何度か再犯を繰り返すうちに、今度は刑務所に入るといった場合もありますが、覚せい剤ばかりやっていたけれどきちんと更生して、結婚して子どもが生まれましたという話を聞くこともあります。「あの時先生にみてもらって、ここでやっていたことが役に立ちました」と職場へはがきが来た時はすごく嬉しかったです。

1) 令和2年度法務省犯罪白書より：平成27年度における少年院出院者の5年以内再入院率・入所率は22.7%であった。一方刑務所出所者の5年以内再入所率は37.5%（満期釈放、仮釈放者の総数として）であった。

### 一なぜOTを目指されたのですか

作業療法という仕事は何かの本で見たことがありました。元々は女子少年院にいましたが、異動し、法務教官を辞める時は医療少年院にいました。そこは精神疾患のある子ども達もいました。中には少年院の生活にもなかなか馴染めない子ども達もいました。暴れたり、人に噛みついたり。ある時倉庫の片づけをしなければいけないけれど、子どもと面接もしなければいけないという時がありました。時間がなかったので子どもと一緒に、倉庫の物品を整理しながら面談をすることにしました。面と向かって話をするよりも、靴やノートの数を数えながら「最近どうなの」、「うまくやれてるの」と話をしていると、話がしやすく、本人も穏やかになり落ち着いてきたということがありました。普段は暴れてばかりで何度も問題行動を起こす子どもで、通常の集団の日課には入れられないわけですが、倉庫整理をしながら面談をしていると、その子がすごく落ち着いてきたんです。そのあと倉庫整理なしで話だけをするという時には「大道先生、何かお仕事ないですか。私何かお仕事がしたいんです」と子どもの方から言ってきたんです。「いや今日はないからやらなくていいよ」と言いましたが、「私はあれがやりたかった」

と言っていました。私としては彼女に手伝ってもらうつもりでやっていたけれど、彼女にとっては何かを数えたりして自分が役立っているという感じが自分を落ち着かせたんだろうなと感じました。それがすごく私の中で心に残っていました。あの子はいわゆる虞犯といってすごく悪いことをしたわけではないけれど、売春してお金もらって生活していたという子でした。かわいらしい子でしたが、少し知的には低かったので、学校でうまくいかないし、何かアルバイト的なことをするにしても難しかったんだと思います。なのでそれまで何かを頼まれたり、自分が頼りにされたりという経験はなかったのかもしれない。頼りにされたということが嬉しくて、気持ちも落ち着いたのでないかと思います。教え諭すとか、教科書に沿って教えるとかではなくて、一緒に何かをやるとか、自分で仕事をやれる、役立っている、役割を果たせたみたいなきもちが人にとってすごく大事なことなんだなと感じました。その時は「作業」とは思っていなかったですけど、何かやることで落ち着くということがあるのだとしたらそういう勉強をしたいなと思っていました。丁度その時、医療少年院に来ていた精神科のお医者さんからOTという仕事があることを聞きました。なので元々作業療法という仕事があるのは頭の隅にあって、その女の子との出来事もあって、精神科のお医者さんからOTという仕事があるよっていうのを聞いて、それで勉強してみたいなと思った感じです。

あとはもう一つ事情があります。結婚をして、子ども生まれる時期だったのですが、夜勤のことがありました。少年院の夜勤は朝から翌日の朝までで、途中の休憩はあるにしても職場に丸24時間拘束されるので、育児しながら法務教官を続けるのは厳しいなと思いました。別の仕事を考えた時に「勉強したいことがあったな」と思って転職を考えました。退職をして1年間勉強をしてOTの養成校を受験しました。

### 一子育てしながらの学生時代はどうでしたか？

すごく大変でした。受験前はあんなに大変だと思っていませんでした。心理学や発達心理学は大学でやっていたのでそこまで苦労しませんでした。運動学、生理学、解剖学は本当に苦手でした。実習の時もすごく苦労しました。育児もあり勉強に時間を

かけられなかったのでは本当につらかったですね。一人目を産んでから、学校に入って、学生時代に二人目も妊娠したので二人保育園に入れながら学校に通っていたって感じでした。一年休学して3年制の学校を4年間かけて卒業しました。

### 一今のところに就職された経緯は何ですか

医療少年院の時に、精神科の診断がついている子ども達もいたので、その子たちに何ができるかなと考えることもあったので、学生時代から精神科に勤めたいと思っていました。育児もあったので家から一番近い精神科の病院を選びました。

### 一今は主にどのような業務ですか

ずっと同じ病院に勤めていて15～16年目になります。病院のリハ部には精神リハ、認知症リハ、回復期リハのチームがあって、私は精神リハチームの主任をやっています。精神リハは入院の患者さんの精神科作業療法を実施します。リハは集団も個別もあります。精神科作業療法の算定ではありませんが、低体力の方には個別プログラムをサービスで行うこともあります。回復期リハのスタッフもいますので、身障の知見を活かしながら、高齢の患者さんや認知症を合併しているような方、色んな合併症を持っている方に対しては、集団のリハもやりつつ、車いすの選定、ポジショニングなどもやっています。最近では退院支援と地域移行にもっと力を入れたいということで、地域の精神保健福祉の連絡会や稲城市のリハビリ職の集まりなど地域包括ケアシステムをうまく回していくための会議に参加しています。

### 一前職が生かしていると思うところはありますか

私は法務教官の中でもこの子はどういう少年で、どういうことをやっていくといいだろうという最初の評価を行う係にいたことがありました。生活歴を把握し、面接を行い、どこに問題があり、どうアプローチしていくといいだろうという計画を立てる係でした。まず子どもとしっかり話をしたり、心理テストをやったりしていたので、人と話すことについては少しアドバンテージがあったと思います。あと、パソコンのスキルとして表計算や収容少年の名簿から統計報告をするなどの業務もあったのでそれらは今の職場で役立っています。

### —前職に戻りたいと思うことがありますか

それは全くないです。やはり夜勤が大変でした。若かったからなんとかやれてましたけど、今夜勤をやれと言われても年を取ってしまって体力が落ちたのでやれる自信がないですね。

本人の能力をアセスメントし、適応を図ることがOTは可能な職種だということが法務省関係の方にも理解されつつあり、刑務所や東京以外の医療少年院で勤務するOTが少しずつ増えてきている。東京では府中刑務所に2名のOTが勤務しており東京以外では医療少年院にもOTが勤務している。それを受けて次の質問をさせて頂いた。

### —少年院にOTとして入るのはどう思いますか？

それはやりたいです。とつても！面白いと思います。法務教官の時は、「悪いことをしたら反省文を書かせる」「通常の日課に入れずに個室で内省させる」ということもしていましたが、もう少し他にやれることがあったのかもしれないなと思います。今もし私がもう一度法務教官に戻ったら何をするか、と考えることはあります。学校不適應で悪いことをした子に反省文を書かせるだけではうまくいくわけがなく、一緒に料理を作ることがよかったり、上履きを数えたりすることがよかったり、編み物して気持ちが落ち着くという子もいたのかもしれない。方法としてもう少し色々あったのかもしれないと思います。仕事としてもすごく面白いと思います。ただ少年院の良さもあり、反社会的な集団やストレスフルな家庭環境と距離をとり、三食きちんと食べて夜は寝て昼間は活動するという規則正しい生活することで整うというパターンもあるし、OTがいた方がもっと良い処遇を考えられるというパターンもあるので色々だと思います。

### —今一番のやりがいは何ですか

今私は病院にいますが、これからは地域での支援をやりたいです。上司からは地域に出るにはまずは道筋を作ってからだと言われていました。病院から患者さんを地域に出すことをやりたいですが、まずは地域の受け皿を作らなければいけません。日本は世界に比べると精神科の病床がすごく多い国でかつ、一回入院すると在院日数がすごく長いです。そこを

少しでも諸外国と同等にすることに関わっていきたいです。

あと精神疾患があっても地域で生活できるということをもっと色々な人にも知ってほしいです。長期入院中の患者さんの中には「自分なんか外では暮らしていけない」と思っている人がいます。その方々が地域に出て「楽しい」「自分の人生を生きている」という気持ちになるように、そしてそういう人たちを少しでも増やしていくことをやりたいです。ただ、そこがなかなか他職種のの人にうまく説明ができなかったり、ご家族やご本人にさえも理解が得られなかったりするところで困難さを感じるところでもあります。でも実際に「外でなんて暮らせない。一生病院で生活する」と言っていた人が、退院してアパートを借りてデイケアや作業所に通いながらきちんと自分で生活しているという話を聞くと、「あ～やってよかったな」とか「やれてよかったな」と思います。そういう人たちを少しでも増やすということが私の目標です。また、たまに元気でやっていますよって声をかけに来てくれる患者さんがいてくれるのが生きがいでありやりがいとなっています。

### 取材を終えて

立派な法務教官というお仕事をされていましたが、OTになるべくしてなられた方なのかなと思いました。夜勤があるから無理です、戻りたくないですとおっしゃっていましたが、OTとして医療少年院に戻るとしたら？という池上理事の質問にそれはぜひやりたいです、と即答されていたのが印象的でした。また精神科病床を減らし、地域支援にも関心を持たれており、よい刺激をたくさん頂きました。(水口寛子)

お話を伺うと前職の法務教官で対象となる子供たちへの取り組みがまさに作業療法の実践だと思いますので、その後の作業療法士への転職は自然な物に感じられました。また作業療法はやはり“実践の科学”だということを強く思い起こされました。(池上洋)